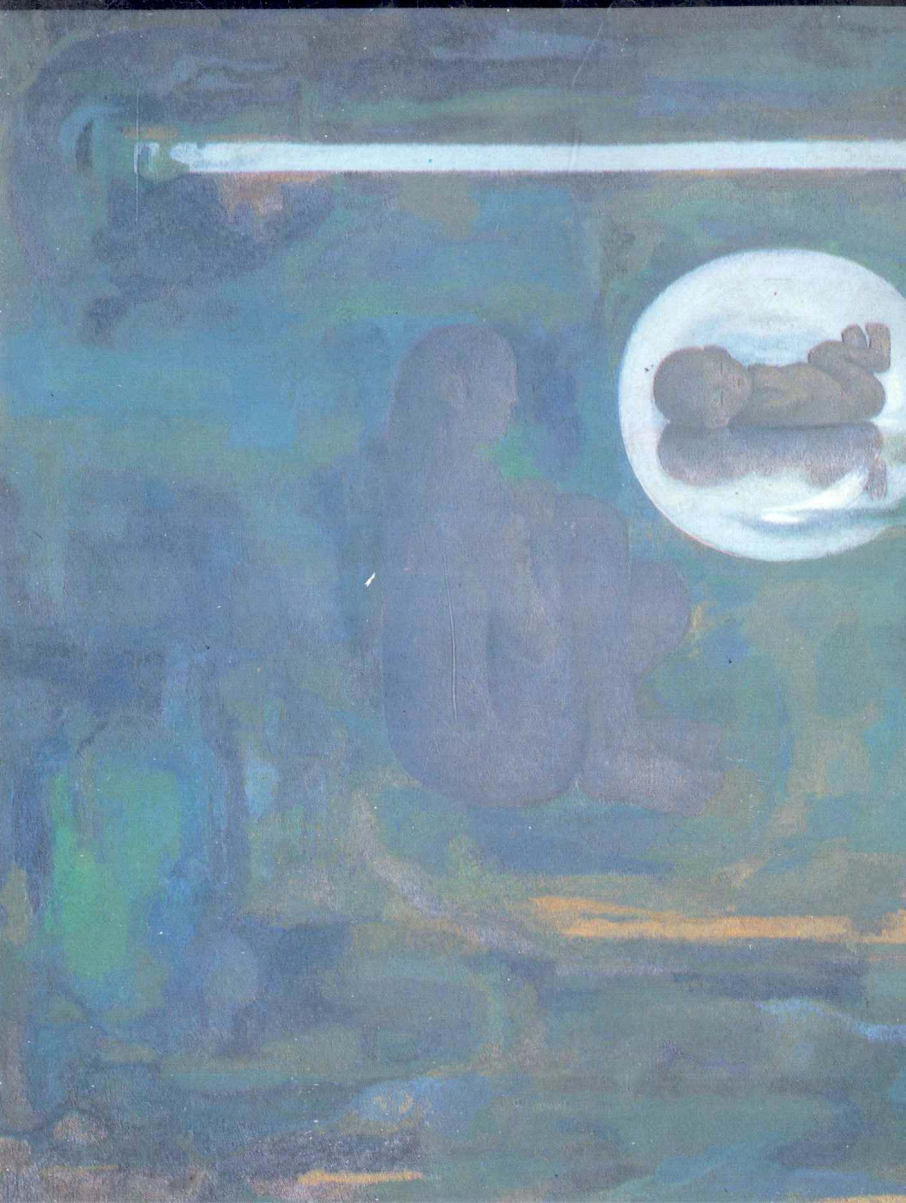


夢 野 大庭みな子



夢野

大庭

講談社

ゆめの
夢野

一九八四年三月二十一日 第一刷発行

著者——大庭みな子

© Minako Oba 1984, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四—二三 (大代表) 振替東京—五三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200595-6(0) (文1)

夢
野

力バ「装画 高山辰雄「母」

第一章

チャイムが鳴ったが、津樹子^{つきこ}はしばらくぼんやりしていた。あらかじめ約束がある人以外には会わないことにしているという習慣もあった。

買うつもりもないものを売るセールスマンだったりすると気が重かった。彼らは彼らなりに生活のためにやっていると思うと、その悲しみがわかり、つい要らないものを買ってしまったりする。そういうことが度重なると億劫になって、いっそ出ないほうがよいという気分になる。

それに、このところ津樹子は纏めなければならぬ本のことで頭がいっぱいで、集中している状態を中断されるのがいやだった。

「創る暮し」という本を書いている。随筆風に文章を書きながら、やっている手芸塾の弟子たちの作品の写真を入れたり、その作者の言葉や人となりを紹介したりもする。手芸ばかりではなく、料理、家の模様替え、小さな家具、など創意のあふれたものなら何でもというふうに、折りにふれて見聞きしたものをとりこんでいる。

以前、高校で手芸を教えていたこともあったが、婦人誌の編集を手伝って手芸や料理のことを受け持つうちに、いつの間にかこういう仕事をするようになった。

姿を見ない訪問者が帰ったかと思う頃に、またもう一度チャイムが気の抜けたような鳴り方を

して、津樹子はドアの方を見た。偶然何かが触れて鳴ったというふうな、まるで風の訪れに似た呼び声である。

生活に追われて機械的に繰り返す仕草の鳴らす音ではない響きに、彼女は思い直してドアの前に立っている人物の姿を確かめなくなった。

女一人暮しの用心深さで、まず廊下側の寝室の窓から覗くと、そこに祖母の志津^{しづ}が立っていた。まあ、ひとりでエレベーターに乗れたのかしらと思ひ、大急ぎでドアを開けた。

志津はむかし祖父の克樹^{かつき}が使っていたステッキを杖代りについてそこに立っていた。傘の柄のように丸くなったところに胸をあて、上半身を支えるようにして、九階から見下ろせる家並を眺めていた。

「まあお祖母さん、よく一人で来られたのね。ちょっと来る前に電話してくれば、下まで降りてあげたのに」

「ちょうど一緒に乗ってくれた人があったからね。いえね、散歩の途中で急にお前の顔が見たくなっただよ」

志津ははにかんだように笑った。

「でもお祖母さん、急に来ても、あたしが留守かもしれないじゃないの。それに、仕事のお客さまだったり——」

「無駄足踏んだって、どうってことないさ。すぐそこなんだから」

志津が傘立てに入れたステッキを見て、津樹子は、子供の頃それを持ってよく散歩した祖父に連れられて歩いたことを思い出した。祖父が死んでもう十五年になる。

志津は明治三十二年、一八九九年の生まれで今年八十四になる。からだも気持も若くて、自分のことを「前世紀の遺物は困ったものだね」といった言い方をする。一八九九年の生まれだと自

分の年といろんな出来事がよく重って数えやすいと言っている。

「何しろあたしの年になると、普通だったら自分の年を忘れてしょうがないもんだけどね、あたしは便利だよ。でも最近は今年が西暦何年だったかって忘れるんだから困ったものだ」

前世紀の生まれの志津は毎日一人で散歩をする。

津樹子の住んでいるマンションから若い者の足なら歩いて十分とかからないところに、息子の龍樹——津樹子の父親——夫妻と一緒に住んでいるが、マンションの近くまで来ても九階の孫娘のところまで一人で上ってくることはなかった。

津樹子の母親は二十七年前、彼女が十一のとき死んだ。だから、津樹子はこの祖母に育てられたといってもよい。

龍樹は自分にとっても亡妻の麻子にとっても従妹に当る志奈子ともう十五年一緒に住んでいるが、法律的には結婚していない。

しかし、津樹子は志奈子を義母だと思っている。義母だと思っているが、「志奈子さん」と呼んでいた。そう呼ばれることを志奈子が好んでいたから。

志津は年に一度くらいはマンションというところに行ってみたいと言い、津樹子が生家に立ち寄ったついでに連れてくることもあるが、ひとわたり部屋を見まわし、しばらく昔話をして腰を上げる。決して長居することはない。

「エレベーターの前でしばらく待っていたら、乗る人が来たんで、すみませんけど、九階まで行きたいんですが、って言ったんだよ。その人は八階までだったけれど、あたしが一人でエレベーターの中にいるのは怖いから一緒に降りて、あとは階段を歩いて上りますと言ったら、一緒に九階まで乗って来てくれたよ。親切な人だったわ。お前からお礼を言っておいておくれ」

「まあ、よかったわね。でも、さっきも言ったように、急に来たりして、もしあたしがいなかった

たりすると、帰るときまた一人でエレベーターに乗れないでしょう」

津樹子は言いながら、やっぱり窓から覗いてみてよかったと思った。

「ボタンを押してエレベーターの前で待っていて、扉があいたとき、中に人がいれば乗るから大丈夫だよ。誰もいなければ、しばらく外を眺めていれば、そのうち誰か来るだろう」

誰かと一緒にいれば安心だと思っている祖母を津樹子は愛おしく見つめた。現代では他人がいると怖いと思う人もいるだろう。

「人がいれば怖くないのね、おばあさんは」

「人がいれば怖くないよ」

志津は答えた。

志津は中に入るとドアを閉めようとする津樹子に言った。

「マンションというのは出口はここしかないんだろう。開けておいたほうがいいんじゃないかい」

「どうして」

「だって、地震があったりすると出られなくなるじゃないか。九階じゃ、窓から飛び降りるというわけにもいかないし」

「でも、不用心なもの。奥に入っちゃうと、入口の物音が聞こえないし」

津樹子のかまわずかけ金をかけた。

志津はその金属の扉をみて呟いた。

「何だか牢屋のようだね」

「あたしと一緒にだから大丈夫よ、牢屋だって」

津樹子は笑った。

「下の庭を散歩していて、上を見上げるとバルコニーのところに、お前の姿がちらと見えたら、急に思いついたんだよ。ときには思い切ったこともしてみなくちゃと思ってね」

さっき花に水をやっていたときだろう。

志津はバルコニーのところに行って下を見下ろし、おお、怖わ、というふうに身を引いた。このマンションは寺の境内にある。志津はソファに腰をおろし、不安そうに窓の外を見た。

「こうして坐ると、空しか見えないんだね。自分の足で縁の外に出られないというのは、落ちつかない」

志津はソファの上に足を折って坐っている。

「お祖母さん、畳のお部屋にする？」

いつもは決して人を通さない仕事部屋にしている、隣の日本間の襖をあけて津樹子は言った。

「そうだね」

志津は津樹子の仕事部屋の六畳に坐った。

「ここで仕事をしているのかい」

志津はとり散らかされた坐卓の上や畳の上にくずれかけて積み重ねられた本を見た。

「そうよ」

「何を書いているのかしらないけれど、こんな牢屋みたいなところに独りで住んでいると、しまいに気がおかしくなってしまうよ。窓からは空しか見えないし」

「空しか見えないってさっきから言うけど、ちゃんと何だって見えるわよ。お寺の庭だって鐘だつて、ほら道を行く人の姿だって見えるわ。それに、今日は晴れていて、富士山がよく見える」

津樹子はバルコニーに出て下を見下ろしながら言った。

「おお危い、こっちにひっこんでおくれ、お前がそんなところに立っていると、あたしまで目ま

いをするようだよ」

志津は首をふって、バルコニーに出てこようとはしなかったが、それでも立ちあがっていくらか身をのり出すようにして津樹子の指さす方に富士山を見ようとした。

「おや、ほんとによく見える。しばらく見なかった。いつの間にか、うちの庭からは見えなくなってしまったから、富士山の形を忘れてしまふよ。もともとこの辺は、少し高い丘に上れば富士の眺めがよくて、昔は目黒の元富士とか新富士とか言えば、有名だった」

「何？ その元富士とか新富士とか言うのは」

「富士講だよ」

「富士講って？」

「富士信仰っていうのかねえ。お寺なんぞの境内に富士山を象って築山を築き、浅間神社を祀り、昔は信者たちから集めたお金で無尽のようなこともしていたんじゃないかね。まあ、そんな講とは関係なく、富士山の眺めがよいから行楽の客が集ったものだよ。あたしも子供の頃、麻布の家からお祖母さんに連れられて山開きの日に一度来たことがあった。祭りの店がずらりと並んでいた。」

華名の家に嫁に来るとき、目黒だというんで、あああの元富士や新富士から見えた田舎なんだなあと思ったものだよ。その頃はまだ目黒川沿いは田圃で、水車なんぞがまわっていた。目黒と言えは^{たけのこ}筍と落語のさんまを思い出すようなところだったもの。

あたしを目黒に嫁にやると聞いて、嘉永の生まれだった祖母さんなんぞは、寺に竹藪しかないようなところに娘をやるのかと泣いたものだ」

津樹子の方からは週に一、二度は必ず生家の様子を見に出かけるようにしていた。それを志津の方から出向いてきたのはどういふ風の吹きまわしかと彼女はいぶかっていた。

めったに出来ない志津は来るといつも同じことを言う。南側のバルコニーの方を見て、手すりまでは決して近寄らず「おお、怖わ」と言い、首をめぐらすようにして「富士山は見えるかね」と言う。高所恐怖症なのだ。

次に首を東の方にまわすようにしながら、競馬場の話を始める。

目黒の競馬場は明治から大正、昭和の初めにかけてあったらしく、シーズンには目黒駅から権之助坂を下って競馬場までの道は大変な賑わいだったという。

志津も娘時代父親に連れて来て貰ったことが一度あるそうだが、紋付きの羽織袴の人たちがぞろぞろ歩いたり、人力車なんかに乗っていたと言っている。

「何だか、うんざりするほど長く待って、そのうち、砂ぼこりをあげてあつという間に馬が駆け抜けて行くだけの、つまらないものだと思っただよ」

目黒に嫁に行くとき、ああ、あの競馬場のあるところだなあ、と思っただら、相手の男の父親というのは競馬事業に関係しているとかいう話で、婚家先の家風が想像のつかない世界に思えたという。

それから志津は北側の窓の外も必ず見る。目黒川の方を見て、彼女が嫁に来た頃はまだその辺りにあった水車や田圃の話をする。北側の窓の外には更に廊下があり、視界だけ残して厚い壁がある。南のバルコニーのように怖くないらしい。

志津の舅、克樹の父親は志津が結婚したばかりの頃は駒場の農学校で教えていたということだ。その縁談は志津の親友だった吾妻文子の母親の口利きだった。吾妻文子は家庭の女たちの築く文化を主調にした個人的な私立の女学校を創立した大正時代の知的女性として後に名が高くなったから、志津はこの友人をとて自慢に思っていた。

みんなが「吾妻文子先生は——」などというところを、彼女はこの幼な馴染みの友人を「お文

さんがね」と言えるだけでわくわくした。

「そりゃあ、お文ちゃんは小さい時から普通の子じゃなかった。何でも自分で考えることのできる子だった。使い古しの人形を台に、全然違う西洋人みたいな顔や手足にして、髪まで結って、着物の残り切れで、可愛らしい洋服を着せた。

最近、ほら、江戸小紋だの、紅型みたいののだ、友禅なんかで洋服作るのがやつと流行って来たじゃないか。あんなのはとっくの昔、七十年前に、お文さんが思いついたことさ。

お文ちゃんと遊んでいると、次から次に新しいものが見えて来るような気がしたもんだ」

志津の話の中では吾妻文子はお文さんになったり、お文ちゃんになったりするが、彼女がその名前の中にこめる親愛の情は一貫して変らなかった。

志津は息子の龍樹の嫁も、吾妻文子の創立した吾妻女学院を卒業した麻子を貰ったし、麻子の生んだ孫娘の津樹子もその学校に入れた。妹の娘の志奈子まで吾妻女学院に入れてしまった。

「吾妻女学院は今じゃもう昔の吾妻女学院じゃなくなっちゃたのよ。戦後無理に大学にするのに文部省のお役人たちをたくさん入れて、全然べつの学校になっちゃったのよ」

と津樹子が言うと、志津は首を振って見えなくなった富士山を無理に見ようとするふうにはうっと眼を宙に漂わせる。

「お文さんは子を生まなかったからねえ。お文さんにたった一つ足りないことだったよ。そうかねえ、お文さんの息のかかった人たちはいったい何をしているんだらう。でも、いなくなるはずはないよ。とにかくお文さんは確かにいたんだからね。あたしがこうして覚えているってことが何よりの証拠じゃないか。——それにともかく大学になったんだらう。やっぱり大したもんだよ、お文さんは」

志津の言葉に津樹子は、それはそうかもしれない、現にその学校を卒業した自分がこうして祖

母の話聞かされている、と、今は吾妻女学院という名だけは残っている自分の母校のことを思い浮かべる。

馬のことに夢中になったのは克樹の父親だったということだが、克樹も晩年は馬のことをよく言っただ。

克樹の父、民樹^{たみき}という男の生涯に関しては、彼が死んでしまってもう五十年にもなるのに、つぎつぎに自分の知らなかった新しい話がつけ加えられるので、曾孫の津樹子はびっくりしている。

祖父の克樹が農学校や林業試験場に勤めていたのは曾祖父民樹の影響でそういう道に進むようになったということだ。

民樹は一時期、庭師たちを集めて塾のようなものをやっていたことがある。個性的な私塾のあり方をうたっていた吾妻文子を礼賛する息子の嫁、志津の言うことにもよく耳を傾け、そのことは姑の気を悪くしていたと志津は言った。

その後、馬のことに熱中して競馬場の設立に一役買った。ビール会社の小株主になって、どうにか生活には困らなかったが、なんとなく奇妙なじいさんで近所には顔売っていたということだ。

葦名民樹は要するに気の多い男だったのであろう。

志津の思い出はあちこちにとび交い、時間と場面が後先になって、ときどき登場する人物もごっちゃになる。

「あの頃は競馬といっても、軍の馬を改良するとか言っただね、何かそんなことをしていたのではないかと思うよ。お舅さんは。

でも競馬というのはなんだかやっぱいろいろヤクザなものがからんでくるらしく、そのうち

馬券を売るのも禁止になったりして。でももともと目黒に土地を買ったのは、競馬場が近いってことだったようだ。もっとも初めは池上とか根岸とか言ってたこともあったようだ。

もうみんな忘れてしまった。ただ、あの人たちは、まあ馬が好きだったのさ」

あの人たちというのは誰と誰だろう、津樹子は母方の親族である佐竹だの相馬だのという姓の人たちを思い浮かべる。姓の思い出せないのもある。親族はその人たちが住んでいた地名の下に名だけつけて、札幌の栄さんがとか花巻の四郎さんがとか山口のおつやさんがどうこうしてといった言い方をするので、札幌の雪の景色や東北弁や中国地方のイントネーションなどは甦ってくるが、姓はよくわからないのである。

志津の実家のことから山本だろう。麻子の親戚なら佐竹某であろうと思っていると、山本や佐竹に嫁いで来た女の実家の者であったり、その娘たちが嫁入った婚家の者であったりする。

続き互^{わた}って雑然とひろがり、端の方はふわふわとぼけてしまっているそれらの物語の中で、葦名家を含む一族に馬のことを持ち込んだのは、どうやら津樹子の母方の祖母の生家、百木^{ももき}の男である安治^{やすじ}という人物らしい。

古いアルバムに百木安治という男の変った写真が二枚ある。一葉は人力車の車夫のようななりをして、車には黒い眼鏡をかけた美しい女を乗せている。その女は彼の妻でおつまさんという名だったということだ。一葉は、ヘルメットのような帽子をかぶって馬に乗っている。

ともかく民樹は農学校で木や草をいじっていたらしいけれど、馬にも興味があったのは、競馬馬のサラブレッドなるものの物語にみられる交配にまつわることらしく、今という遺伝学のようなものである。

津樹子は祖父が曾祖父が残したという植木をいじりながら、「これが元気がなくなったのは民樹祖父さんが死んでからだ」というような言い方をしていたのを覚えている。馬については人間

もよく馬に例えられた記憶がある。

志津が百木安治という男をあまりよく言わなかったのは、安治が嫁の麻子方の一族であったからだろうが、最近ではいつの間にかその安治も、舅の民樹も、夫の克樹もいっしょくたに、あの人たちという言い方をするようになっていた。

民樹が目黒に居を定めたのは、そもそも馬に惹かれてだったということだ。そう言えば、目黒界限には駒場、駒沢、下馬、上馬、馬込など、馬にまつわる地名が多い。もちろんそれらは今の目黒区ではないところもあるが、いずれにしてもこの辺り一帯はその昔は雑木に烟る原野のあちこちに馬の姿があつたものであろうか。

二十世紀も終りに近づく今、志津が孫娘の住むマンションを訪ねて、消え去つた目黒の水車や水田の風景をなつかしんでいるように、目黒の富士講に連れて来られた頃の志津に、嘉永生まれの女は富士を背に遊ぶ武蔵野の馬のことを語つたかもしれない。

志津はひとしきり昔話をする、意志的な顎をぐいと引いて、何か言いたいことが心にありそのような気配だつた。

その祖母の表情を見ると、ふと津樹子は母の麻子が早く死んだのは、この祖母のせいかもしれないと思つた。

母の麻子は口数の少ない内攻的な性格だつた。いつも志津がべちゃくちやと喋って家の中を切り盛りしているように思われた。

長い戦争から戦後にかけて、もともとあまり体の丈夫でなかった麻子は、空襲やら疎開やら、買出しやら、身も心も疲れ果ててしまったのだ。

津樹子は疎開先の小岩井牧場で生まれたということだが、間もなく東京に戻つたのでその頃の記憶はない。

ただ、麻子は津樹子を生んだ頃から心臓を悪くして、青くむくんだ母親の病床の傍で子供心に心細く落ちつかない気分で絵本などを読んでいた幼い津樹子が、母の言った言葉でたった一つ妙に頭にこびりついて離れないものがあつた。

「つうちゃん——（母は津樹子をつうちゃんと呼んでいた）お嫁に行くときは、あんまり丈夫なお姑さんのいるところには行かないほうがいいかもしれないわね」

病床の麻子は幼い津樹子の手を握りしめて言った。

「からだが丈夫な人には、からだの弱い人のことがわからないから」

その言葉は深く津樹子の心に突きささって残っていた。それが頑健な心身を持った志津に向けられた批難がましい恨みであつたということを、津樹子は祖母の意志強固な顎の引き方を見る度に思い出す。

しかし麻子と志津が不仲であつたという情景はとくべつ浮かんではこない。ただつねづね麻子が志津を賛えるように、

「お姑さんはお丈夫なのね。肉体年齢は、わたしなんかよりずっとお若いわ」

というような言い方をしていたことに、「からだの丈夫な人には、からだの弱い人のことがわからないから」という言葉が重なるのである。

志津の方は、麻子の賛辞をそのまま受けとって、いっそう生き生きと若やいで見えた。この祖母の活力が、母の精気を吸いとってしまったのだ、と津樹子はちゃんと背を伸ばして正坐している志津をみつめた。

「あたしがずっと生きていれば、一人娘のあんたは養子をとることになるだろうけれど——でも、この御時勢じゃ、そんなことは言わないほうがいいかもしれないわね。民法も変つたんだし」